

# 現代の子方(一)

## 此親にして此子あり

工學博士 古 市 公 威

### ▽追憶として

かういふ問題に對して彼是論評を加へるといふことは本來余の最も欲しない處である。また殊に他のものに對すると異なり子方は何んと云つても現在といふことよりも寧ろ將來のみに屬してゐるものだと云つていゝのだから猶更それに論評を差し加へることは難中の最も難事である、といふよ

りも彌々暴舉に近しと云つてもいゝくらいだと思ふ。だから余は其意味なら全然口をつぐまねばならぬ。で余は此處には單に余が今日までの間に受けたる最も深い印象或は感慨と云つたやうなものを極く簡単に掻いつまんで話すことゝしよう。

### ▽天覽能の望月

それは今から考へると大分舊いことである。余

が歐羅巴から歸朝した翌年であつたから何んでも明治二十三年頃であつたと想ふ。先達崩御になつた皇太后宮の催しの天覽能が青山御所であつた際に余の望月のシテにて竹代(現今の六郎)が子方に出たのであつたが其の時の鞆鼓の如きも實に大人にもあざ／＼遜らぬほどに完全な技倆を有つてゐたのに感心したので未だにそれを忘れることが出来ない。

### ▽龜之の望月

ところが其の後竹代が生長して六郎となつて矢張り望月を演じた時に龜之が勤めたことがあつた尤もこれは余は観ないで觀た人から聞いたのであるが、前の竹代のよりもなほ數等卓れたものであつたといふ話であつたが、其の時の龜之は前の時の竹代に比べて餘程年下なのである。如何にしてもそんなとがと内々不思議に感じて居たものだ。

### ▽大人も及ばぬ技倆

その後暫く觀る機會がなかつたが先達万三郎のシテで矢張り龜之が望月に出るといふので早速行つて觀た、處が話に違わず實に驚くべき老熟非凡な技を見せた。余は寧ろ一種の奇異な感が生じた程であつた。元來この望月の子方の鞆鼓は大人でも完全に出來るものは少ないと云つていゝのである例へば鞆鼓へ撥を半間に當てるのでも頗る難事としてあるものであるが龜之はそれを完全に打つてのけた。

以上述べたことが余の頭腦に最も深く刻まれたる唯一の印象である。たゞそれ印象である。その他に何にも云ふことはない。